斑鳩町の寺社建築の特徴

―斑鳩町の寺社建築の悉皆調査より―

はじめに　奈文研建造物遺構研究室では、斑鳩町に所在する歴史的な建造物の所在をあきらかにし、文化財行政の基礎資料とするため、2024年度に町から「『新修斑鳩町史』編さんに伴う町内歴史的建造物悉皆調査業務」を受託した。斑鳩町の寺社建築については、奈良県と奈文研が実施した奈良県近世後期社寺建造物調査（以下、近世後期調査）にて、2020年度に悉皆的に調査を実施し、調査票、調査位置図、写真撮影、寺社建築のリスト等の作成をおこなっている。そのため、今年度寺社建造物については、近世後期調査にもとづいて個別調査対象の選抜をおこない、必要に応じて追加の現地調査を実施した。

なお、本稿は目視による外見観察にもとづく悉皆調査の成果を基本とした報告であり、全体的な傾向を報告することを目的としたものである。

上記の方法で確認した物件は、80件、509棟を数える。このうち寺院建造物は380棟、神社建造物は129棟である。また、全体の約40％にあたる203棟が法隆寺の建造物である。近世以前の建造物は150棟確認でき、全体の約29％にあたる。内訳は、16世紀以前が45棟、17世紀前期が15棟、17世紀中期が３棟、17世紀後期が18棟、18世紀前期が14棟、18世紀中期が10棟、18世紀後期が11棟、19世紀前期が12棟、19世紀中期が22棟であった（表８）。文化財指定されている建造物は61棟（うち56棟が法隆寺の物件）、登録されている物件は１棟である。

寺院建築　仏堂は、小規模な地蔵堂も含めると105棟（うち法隆寺の物件33棟）確認できる。次いで門が97棟（法隆寺61棟）、庫裏・客殿等が56棟（法隆寺24棟）と続く。経蔵・倉は22棟（法隆寺18棟）、廻廊・廊が14棟（法隆寺13棟）、鐘楼が12棟（法隆寺４棟）、手水舎が５棟（法隆寺４棟）、塔婆が４棟（法隆寺１棟）であった。門や庫裏・客殿、経蔵・倉、廻廊・廊、手水舎等が法隆寺に集中している。残る47棟は上記の類型のいずれにも分類されないものであった。

その中でも、古代からの由緒を持つ寺院が注目される。創建金堂と同じ位置に建つ法輪寺金堂は、基壇をもち、内部を土間にするという、古代の仏堂を彷彿とさせる形式をもつ[1)]。また、法起寺の聖天堂（図42）と講堂（本堂）はそれぞれ創建金堂、講堂の位置を踏襲しており[2)]、近世の事例でも古代の斑鳩の伝統を引き継ぐ寺院建築の存在が知られる。法輪寺金堂と法起寺講堂の外観がともに二重屋根、寄棟造であることも、古代の仏堂を意識した結果かもしれない。

また、寺院内に鎮守社として設けられている神社建築を確認した。本殿は13棟（法隆寺７棟）、本殿覆屋が３棟（法隆寺１棟）、拝殿が２棟（いずれも法隆寺）である。

神社建築　神社は23件確認できた。神社に所在する本殿建築は78棟確認でき、すべて一間社である。このうち、本殿以外の境内社が55棟に上る。本殿建築のうち約62％にあたる48棟が、見世棚造であった。形式は、春日造が61棟と約78％を占め、流造は14棟で、この２形式で約96％を占める。これは奈良県の一般的な傾向と整合的である[3)]。その他に、切妻造が３棟（うち妻入が２棟）確認できた。なお、隅木入春日造は全く確認されていない。屋根葺材は、約77％にあたる60棟が銅板葺で、次いで鉄板葺が６棟、厚板葺が５棟、檜皮葺が３棟、本瓦葺が３

図42　創建金堂の位置を踏襲した仏堂（法起寺聖天堂）

図43　独特な意匠をもつ春日造本殿（菅神社本殿）

表８　斑鳩町内の近世の建造物の分布（2024年２月時点）

番号	地域名	16世紀以前	17世紀			18世紀			19世紀		備考
			前期	中期	後期	前期	中期	後期	前期	中期	
1	法隆寺山内	41	5	2	15	11	5	8	5	10	法隆寺が所在。指定あり。
2	法隆寺北		2					1	1	3	中宮寺が所在。登録文化財あり。
3	法隆寺南				1						
4	法隆寺西		1								
5	三井		2			1	1	1		1	法輪寺が所在。指定文化財あり。
6	岡本	1		1	1		1	1		1	法起寺が所在。指定文化財あり。
7	幸前									1	
8	高安		1								
9	興留東	1				2					指定文化財あり。
10	五百井	1							1		指定文化財あり。
11	目安									2	
12	神南		1				1				
13	小吉田	1								2	指定文化財あり。
14	稲葉車瀬									1	
15	龍田				1		2		4		
16	龍田南		3								
17	龍田北								1	1	
	（町内合計）	45	15	3	18	14	10	11	12	22	

棟、桟瓦葺が１棟であった。神社に所在する拝殿は、19棟確認でき、すべて平入である。神社は23件あるため、その約83％に拝殿があることになる。屋根形式は切妻造が16棟、入母屋造が３棟である。権現造のような複合形式は確認できなかった。屋根葺材は15棟が桟瓦葺、３棟が本瓦葺、銅板葺が１棟である。その他、手水舎が12棟、本殿覆屋が５棟、門が４棟、幣殿が３棟、社務所が３棟確認できた。なお、神社の境内においても寺院系の建築として地蔵堂を１棟確認している。

その中でも春日造本殿の事例が注目される。春日神社（目安）の本殿は春日大社本殿と同形式で、天保15年（1844）に春日大社本殿（第一殿以外の社殿）として建立されたものが文久３年（1863）に移築されたものとみられる[4)]。また、菅神社本殿は、その建立年代が17世紀前期と古いことが知られるが[5)]、独特な細部意匠をもつことも注目される（図43）。同本殿は、屋根を厚板瓦棒葺とし、身舎を一軒疎垂木、庇を一軒繁垂木とする。春日造本殿は、身舎を繁垂木とし、庇を疎垂木とする事例（春日大社本殿など）や、身舎・庇ともに繁垂木とする事例（圓成寺白山堂・春日堂など）が多く、身舎の垂木を疎垂木とする事例は国宝・国指定重要文化財の建造物に限ればほとんど見られない[6)]。また、菅神社本殿と屋根形式などが類似する子守神社本殿も確認されており、斑鳩地域独特の本殿として注目される[7)]。

おわりに　本稿では、過年度に実施した近世後期調査の成果を元に、斑鳩町における寺社建築の傾向を示した。寺社建築が特に法隆寺に集中することや、神社建築については春日造本殿が多いことなどを改めて確認した。個別の事例としても、斑鳩の古代寺院の伝統を引き継ぐ仏堂や、春日大社との関係が想起される神社本殿、独特な意匠的特徴をもつ神社本殿など、当該地域に特徴的な事例を確認している。

現在、以上の検討を踏まえ二次（個別）調査対象の選抜をおこなった上で、2025年３月から個別調査に着手している。今後、個別調査を積み重ねることによって、斑鳩町における寺社建造物の特質をより具体的にあきらかにしていきたい。

（山崎有生）

註

1）奈文研編『奈良県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査』奈良県教育委員会、1987。
2）『斑鳩町史 本編』斑鳩町役場、1979。
3）前掲註１文献。
4）前掲註１文献。
5）前掲註１文献。および福嶋啓人「斑鳩地域の慶長期神社建築－斑鳩神社・菅神社を事例に－」『紀要 2021』36-37頁。
6）図書編集部編『国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻）』毎日新聞社、1998。
7）菅神社本殿や子守神社本殿と類似した手法で屋根を葺く国指定重要文化財の事例として御霊神社本殿（奈良県五條市中之町）が確認された。今後二次（個別）調査を通じ、具体的な関連をあきらかにしていきたい。